武蔵野日曜集会
○
――ローマ書第10章――

１９７８年10月29日（武蔵野）
小池辰雄

神の妬み　神の熱心　キリストは律法の終り　神さまは霊法そのもの　福音の円環構造　祈り
の世界で受霊すること

【ロマ10】

1兄弟よ、わが心のねがい、神に対する祈は、彼らの救われんことなり。2われ彼らが神のために熱心なることを証す、されど其の熱心は知識によらざるなり。3それは神の義を知らず、己の義を立てんとして、神の義に服わざればなり。4キリストは凡て信ずる者の義とせられん為に律法の終となり給えり。5モーセは、律法による義をおこなう人は之によりて生くべしと録したり。6然れど信仰による義は斯くいう『なんじ心に「誰か天に昇らん」と言うなかれ』と。7これキリストを引下さんとするなり『また「たれか底なき所に下らん」と言うなかれ』と。是キリストを死人の中より引上げんとするなり。8さらば何と言うか『御言は、なんじらに近し、なんじの口にあり、汝の心にあり』と。これ我らが宣ぶる信仰の言なり。9即ち、なんじ口にてイエスを主と言いあらわし、心にて神の之を死人の中より甦えらせ給いしことを信ぜば、救わるべし。10それ人は心に信じて義とせられ、口に言いあらわして救わるるなり。11聖書にいう『すべて彼を信ずる者は辱しめられじ』と。12ユダヤ人とギリシヤ人との区別なし、同一の主は万民の主にましまして、凡て呼び求むる者に対して豊かなり。13『すべて主の御名を呼び求むる者は救わるべし』とあればなり。14然れど未だ信ぜぬ者を争で呼び求むることをせん、未だ聴かぬ者を争で信ずることをせん、宣伝うる者なくば争で聴くことをせん。15遣わされずば争で宣伝うることを為ん『ああ美しきかな、善き事を告ぐる者の足よ』と録されたる如し。

16然れど、みな福音に従いしにはあらず、イザヤいう『主よ、われらに聞きたる言を誰か信ぜし』17斯く信仰は聞くにより、聞くはキリストの言による。18されど我いう、彼ら聞こえざりしか、然らず『その声は全地にゆきわたり、其の言は世界の極にまで及べり』19我また言う、イスラエルは知らざりしか、

先ずモーセ言う『われ民ならぬ者をもて汝らに嫉(ねたみ)を起こさせ、愚かなる民をもて汝らを怒らせん』20またイザヤ憚(はばか)らずして言う『我を求めざる者に、われ見出され、我を尋ねざる者に我あらわれたり』21更にイスラエルに就きては『われ服(したが)わずして言いさからう民に終日(ひねもす)手を伸(の)べたり』と云えり。

●神の妬み

1**兄弟よ、わが心のねがい、神に対する祈は、彼らの救われんことなり。**

9章でパウロが言っているところの、

「もし、我が兄弟わが骨肉の為ならんには、我みずから詛(のろ)われて、キリストに棄てらるるも亦ねがう所なり」（ロマ９・３）

というこの句に、10章の第1節がまた相応じているような句です。「どうしても彼らの救われんことなり」と。

2**われ彼らが神のために熱心なることを証す、されど其の熱心は知識によらざるなり。**

この「神のための熱心」「ゼイロン・テウー」という、「熱心」という字は――「ジェラシー」「妬み」という字がありますが――旧約からこの「熱心」という字によく「妬み」という字が使ってある。「神の妬み」「エール・カンナー」と言う。これは「熱心」でいいけれども、とにかく、相手がサタンにとられては大変だといって、魂を熱愛して、サタンから取られないように神さまが愛することが、この「妬み」という字です。サタンだとか、他の神々への信仰とか、そういったものから守る気持ちも、神さまの顧みの愛がこの「妬み」という言葉なんです。

それから来ているのですが、この場合の「神の妬み」は――ギリシヤ語では「神の」は二格で書いてあるから、神が主体ならば、神が主語ならばいいけれども――この場合は「神に対する熱心」という、同じ二格でも目的的な二格と、主格的な二格があるので、これは目的の方に解釈されています。またそれでなければ、この場合、前後の意味を成さない。だから、「神の妬み」と言うと、これは神に対する熱心です。同質的に訳すと、「神のための」「神を求めての」ということ。

ところが、ヘタすると、いわゆる信仰の熱心な人が間違いを犯す。こっちからの熱情になってしまって、神に対する熱心になる。「あの人は信仰が熱心だ」なんて言って、こっち側からの熱に、客体的な熱心になってダメなんです。そういうギリシヤ語の二つの意味がある。

「神の熱心が、汝の熱心が為す」

という言葉がイザヤ書にありますが、あの「神の熱心」というのはいい。イザヤ書59章17節に、

「17エホバ義をまといて護胸(むねあて)とし、救をその頭(かしら)にいただきて兜(かぶと)となし、仇(あだ)をま

といて衣となし、熱心をきて外服(うわぎ)となしたまえり。」(イザヤ59・17)

とある。エペソ書でパウロが信仰のいろいろなことを言っている。あれはイザヤ書59章17節の方がなお上だね。人間の側でなくして、神の義がこういうものを鎧(よろい)しているというような言い方をしているから。非常に旧約聖書というのは生き生きと、擬人的に神さまのことを言っている。けれども、決してそれが偶像にならない。神から来るところの熱心です。神さまの熱心なら聖霊が持っていますよ。聖霊が持っているところの神の熱心です。

●神の熱心

神に対する熱心というやつは、パウロ自身が今までやっていた。そして、クリスチャンを迫害した。あれは神に対する熱心だった。自分がそういう間違いをしたものだから、彼はよく分かっている。そのことは使徒行伝22章3節に出ている。

「3『**我はユダヤ人にてキリキヤのタルソに生れしが、此の都にて育てられ、ガマリエルの足下にて先祖たちの律法の厳しき方に遵(したが)いて教えられ、**律法を非常に学んだわけだ。

今日の汝らのごとく神に対して熱心なる者なりき。

これはハッキリ出ている。神に対して熱心であったと。

4**我この道を迫害し男女を縛りて獄に入れ、死にまで至らしめしことは、…」(使徒行伝22・3～4)**

そういう自分たちのパリサイ的信仰でもって、キリストを信ずる者を迫害していた。これは正に、パウロが「お前たちと私は同じことをしていたんだ」ということを告白しているわけです。だから、使徒行伝22章3節が非常に有力な参考のところです。

我々の信仰も、いわゆる人間の側の信念的な信仰の熱心というやつは、これはダメです。神さまから来る熱心はいい。これは聖霊が持っている。聖霊を受けとらないと、この意味は本当の意味で捉めない。バカづらしていて一向差し支えない。「何だ、あいつは。一体、信仰があるのか」と。どっこい、内側には畏ろしいものを持っている。静かな火がいい。静かな火はいつでも爆発できる。しょっちゅう燃えているような火は消えてしまうよ。

「その熱心は知識によらざるなり」と書いてある。この「知識」というのは「グノーシス」ではない。「エピグノーシス」です。「エピ」が付いている。いわゆる知を超えた知なんです。だから、霊的な知、霊知です。パウロはこの言い方を方々でやっている。

テモテ前書2章4節、

「4**神は凡ての人の救われて、真理を悟るに至らんことを欲し給う」(テモテ前2・4)**

「真理を悟る」の「悟る」というのは動詞の方に訳されているが、本当はギリシヤ語では名詞です。真理への知識、超知。「真理への超知に至らんことを」です。「神は凡ての人の救

われて」というのは、万人救済の神の本願がここに書いてある。真理を悟るというこの「悟る」は動詞に訳していますから、これが「エピグノーシス」、真理へと入っていくところのそういった「エピグノーシス」です。

「真理の知識へと来らんことを、真理の霊知へと来らんことを」

と、そういう言い方をしている。

あと、テモテ後書2章25節、3章7節、テトス書1章1節が、ギリシャ語でみな同じ言い方をしている。「熱心」という字は情熱的なものですから、人間の側から言うと情意だね。

「情意に対して知が欠けている」

というわけだ。平たく言うと、やはり知情意なんだ。知情意がなければ健全ではない。情意的なものが熱心でしょ。それに知が欠けている。

この知は聖霊によっている。どっちだって聖霊から来るんだよ。だから、聖霊にあずかると、ものが見えてくるでしょ。本当の情熱が来るでしょ。上から生命力が来るから。そうなんです。これは体験したらハッキリ分かる。こんな知ばっかりではない。普通のクリスチャンは頭のいわゆる聖書知識だ。なるほど、答案は百点みたいなのを書くよ。けれども、知識ばっかりで観念的になっているから、霊知がないから一向に展開しない。

「お前たちの熱心は、上からの本当の霊知によってないから、人間的熱心ではダメだ。神さまの熱心を、逆に神の熱心を着ろ」

と。神の熱心を着たら、くたびれない。

●キリストは律法の終り

3 それは神の義を知らず、

「知る」という言葉は、神の義を本当に身体で知ること。「知る」と言っても、頭で知るのではない。「神の義を知る」ということが、この知識なんですよ、内容的には。神の義を知るというのは――神さまの義を信仰を通して頂いたでしょ――神の意志を百%に受けとっていることが義と言うんだから。汝の意志を百%に――ゼロ＝無限大、無即無限無量――これが義の世界です。キリストはこの義を神さまからいただいて体現しているわけだ。キリストの義を本当に受けとる。

申し上げている通り、十字架を通して自分がすっかり片づいてしまっているんですから。我という我執が片づいてしまっている。そこに聖霊が来る。キリストの実存そのものがやってくる。聖霊としてやってくる。義の具体的なものが聖霊である。愛の具体的なものが聖霊ですよ。義と言おうが、愛と言おうが、みんなこれは御霊のことです。これが受けとられていることが、全存在でキリストの義を受けとっていることが本当の「知識」なんだ。知識という日本語の言い方が躓きになって困るけれども。「熱心は知識によらず」というのは、「熱心は神の義によらないで」ということ。

己の義を立てんとして、神の義に服わざればなり。

律法的な義を立てようと、パウロは今までやっていたから、ハッキリ言うわけです。

4 キリストは凡て信ずる者の義とせられん為に律法の終となり給えり。

「凡て信ずる者の――すべてキリストを体受する者の、全存在的に受けとる者の――義とせられん為に」と。受けとれば必ず義とされます。「律法の終」とは律法の目的を果たしたもの。「終」という「テロス」という字は「目的」という意味と「終」という意味と二つある。キリストは律法を全うしましたから。ロマ書13章10節に、

「10 愛は隣を害なわず、この故に愛は律法の完全なり」（ロマ13・10）

とある。「愛は律法の完全なり」と。「完全」とは「プレローマ」という字が使ってある。愛は律法を全うしたもの。律法を一言で言えば、愛だと。神からの愛、キリストの愛を受けとって、神への愛、キリストへの愛と、縦の関係と隣人への愛と両方持っている。これが愛というものです。愛は縦横をもたなければ本当の愛ではない。横ばっかりもダメ、縦ばっかりもダメ。だから、

「神を愛することと隣人を愛することは一つだ」

とキリストが言った。この二つは一つなんだ。二つを持たない一つはダメなんだ。いわゆる隣人愛なんて言って、一生懸命に人間的にやったって、これはダメなんだ。「神さま、神さま」と、神さまばっかりやってもダメ。それが本ものであるためには、必ず交通する。縦横一如。この愛は正に縦横自在の愛なんだ。楽しいね、福音は。だから、律法の終りというのは、「すべし、すべからず」なんていう世界は乗り越えてしまった。「ざるを得ない」世界に入ってしまった。

「ざるを得ない」世界に入ったって、人間はダメだから、躓いたり転んだりするよ。いいよ、何だって。けれども、一番中心の在り方というものはハッキリしなければダメです。そうすれば、バラの花の花びらが一つ落ちたって、花は花なんです。造花はいくら完全でも生きてない。そういうように生きた姿は、花びらが散ろうが、虫が食おうが、それは本ものです。どうせ、人間は完全無欠なんていうのはありはしない。みんな破れ器だ。破れ器だけれども、

「その破れ器の中に本ものが生きているか」

だけが問題なんです。そうしたら、未完成の完成という姿になってくるわけです。

だから、キリストは律法の終りとなって、彼は地上でも完全だ、彼だけは仕方がない。完全なる例外者です。それでも、キリストは地上にあっては危機的な存在であった。我々と同じように弱さを持っていた。けれども、彼は勝ってしまった。神百%で生きたから、自分をまた百%に人に与えた。そういうことです。

パウロの言っていることはちっとも難しくないですよ、御霊の光で読んでいれば。「何かパウロさんは難しいことを言っているな」なんて、そうではない。聖書の言葉は、真理は

盛りきれないで困っている。だから、ルターも、

「聖書は神の真理のかけらだ」

なんて言った。愉快な言葉だよ。

●神さまは霊法そのもの

5モーセは、律法による義をおこなう人は之によりて生くべしと録したり。

レビ記18章5節に、

「5**汝等わが例とわが法をまもるべし、人もし是を行わば之によりて生くべし。我はエホバなり」（申命記18・5）**

とある。非常に力強い言葉です。

「私の法を守りなさい、行いなさい。そうすれば、これによって本当に生きる。私がエホバだから」

と。「我はエホバなり」という、この重みがあるから、この最後の言葉が非常に力強い。

「私がヤハウェーの神である。だから、私の法を守ることは、私に連ならなければ守れないということだ」

と、本当はそこまで言ってくれなくては。

「私と連なったら法は守れるよ、そうしたら生きるぞ。私自身が生ける法である」

と。神さまは霊法そのものなんだ。自然界の法則、人間界の法則、霊界の法則。みんな法則です。

この法則に乗っかることが本当の自由である。法に縛られるなんて思っているのは大間違いだ。キリストは完全に神さまの中に乗っかってしまったから、彼の言うこと為すことが、

「わが思うところ矩を踰えず」（七十にして心の欲する所に従って矩を踰えず）

どころの騒ぎではない。孔子はやっと70歳でそうなったけれども、キリストはもう30歳までに自由自在な歩き方でした。何と言ったって上ですよ、絶対に。世界の四聖なんて言ったって、キリストはケタが違う。なぜ、ケタが違うかと言うと、彼は偉かったのでも何でもない。

「私は何ものでもない。神さまだけだ」

と言ったではないですか。こんな楽しい福音が他にあるですか。なんでクリスチャンは難しいことばっかり考えているんだろうね。

本当に律法に即すれば生きる。それが本当の義だと。義しいなんて言ったって、そういうことです。マルチン・ルターはそれをやろうと思ったが、とうとうできないことを知った。それで、キリストに行ったわけです。パウロもそうです。できたなんて思ったら、大間違いだった。自己義認したらパリサイになる。キリストから信仰義認される者は本当です。

「信仰によって義とされる」

は本当は、

「恩恵によって義とされる」

なんだ。漢文の聖書を読むと、「信仰」という言葉ではない。みんな、「信」と書いてある。「仰」の字なんかない。「信によって義とされる」と書いてある。

6然れど信仰による義は斯くいう『なんじ心に「誰か天に昇らん」と言うなかれ』と。7これキリストを引下さんとするなり『また「たれか底なき所に下らん」と言うなかれ』と。是キリストを死人の中より引上げんとするなり。

何のことですか、これ。これは申命記30章12節のところに出ている。

「11我が今日なんじに命ずる誡命は汝が理会がたき者にあらず、また汝に遠き者にあらず。12是は天に在ならねば、汝は誰か我らのために天にのぼりてこれを我らに持ちくだり、われらにこれを聞かせて行わせんかと曰うにおよばず。13また是は海の外にあるならねば、汝は誰か我らのために海をわたりゆきてこれを我らに持ちきたり我らにこれを聞かせて行わせんかと曰うにおよばず。14是言は甚だ汝に近くして汝の口にあり汝の心にあれば汝これを行うことを得べし。」（申命記30・11～14）

口だの心だのと書いてあるね、正にこれをパウロは引用したんです。

8さらば何と言うか『御言は、なんじらに近し、なんじの口にあり、汝の心にあり』と。

これは申命記30章14節から来ている。パウロさんは旧約をよく読んでいるから、すぐ来てしまうわけです。

6……「誰か天に昇らん」と言うなかれ。

というのは、キリストはすぐに下ってくださるから、わざわざ天に昇ってキリストを引っ張りおろす必要も何もないということ。また、キリストは地獄まで下って我々のために十字架の死後、死んで甦えったでしょ。だから、もう下に往くことはない。キリストはもう甦えって我々のところに来ている。だから、キリストの受肉と復活のことが言われている。天に昇って引き下ろそうとしたり、地獄に往って引き上げようとする、そんな必要はありませんよと、申命記から引用している。パウロさんの引用の仕方はそういう旧約的なものを、もっとぐっと新約的に捉まえて使っているわけだ。

8さらば何と言うか『御言は、なんじらに近し、なんじの口にあり、汝の心にあり』と。これ我らが宣ぶる信仰の言なり。

申命記30章14節に、

「14是言は甚だ汝に近くして汝の口にあり汝の心にあれば汝これを行うことを得べし。」

と書いてある。口にあり、心にあるから、行えると言うんです。「言うは易く、行うは難し」

なんて普通言っているけれども、口にあり心にあるから行えると。ユダヤ人というのはやはり信仰の現実では相当力強いものを持っているからね、旧約でも。「行うことを得べし」なんてハッキリ言っている。「なかなか行い難し」なんて言ってないんだ。「行い得べし」と言う。ユダヤ人は、霊的なその内容は何と言ったってある。けれども、ユダヤ人もやはり躓いてしまった。

「口にあり心にあり」というのは――私はその先をもう少し読みたい――口にあり心にありという、その心に本当に来たものは、心のもう一つ深いところの魂に受けとらなくては、神さまの言を、神言を。

●福音の円環構造

「○」。私は今日、題にこんな図を、円を書いた。まず、神の言を魂に受けとります――「霊」と書いたっていい――それから心の中に入ってくる。それから、口、言葉。そうすると今度は、この世界では身につく。「口にあり、そして行為（おこない）」と言った。口は言と同じだ。本当に行うことは身についていなければ行えないけれども。また、それが本当に神の言の行いが証しになる。証行という。証しの行い。循環している。そしてまた、神さまの言を受けとることができる。ぐるぐるぐるぐると回る。もう一つ、私は別な図を書きますから。その次に出てきます。これが相即するんです。

9 **即ち、なんじ口にてイエスを主と言いあらわし、心にて神の之を死人の中より甦えらせ給いしことを信ぜば、救わるべし。10 それ人は心に信じて義とせられ、口に言いあらわして救わるるなり。11 聖書にいう『すべて彼を信ずる者は辱しめられじ』と。**

イザヤ書28章の言葉です。

12 **ユダヤ人とギリシヤ人との区別（わかち）なし、同一の主は万民の主にましまして、**異邦人も選民もありはしないと、民族的なものをパウロは突き抜けてしまった。ソ連人も中国人も日本人もありはしないというわけだ。だから、宗教の本当の世界に入れば、今大騒ぎしているような国際関係だってみんな消えてしまうんだ。バカなもんだよ、人間は。

凡て呼び求むる者に対して豊かなり。13『すべて主の御名を呼び求むる者は救わるべし』とあればなり。

「すべて呼び求むる者は救われる」というのはヨエル書2章32節の言葉です。

14 **然れど未だ信ぜぬ者を争（いか）で呼び求むることをせん、未だ聴かぬ者を争で信ずることをせん、宣伝（のべつた）うる者なくば争で聴くことをせん。15 遣わされずば争で宣伝うることを為（せ）んん**

パウロはぐるぐる回っているような言い方をしている。これを見て、私はすぐ円環関係を考えた。神さまの啓示。神言。今度は天啓がある。パウロはそこのところは書いてない。

天啓があると、その人は天啓によって遣わされる。派遣される。天啓に接して遣わされる。そうすると、その人は伝道するわけだ。宣教でもいい。宣教する人があると、今度は聴くわけだ。身体で聴いてくださいよ、霊聴。そうすると今度は、聴いて信ずる。信じたらば、神さまを呼び求める。これは祈りです。呼び求めて、初めてここでもって、祈りの世界で初めて聖霊を受ける。バプテスマ、受霊。そうすると今度は、その人は派遣される。遣わされて、今度はその人が宣教する。あなた方は誰でも、この円環関係をぐるぐる回って進んでしまうわけだ。そして、人に伝えて行く。すると、この二つの輪が相即しているような内容を持っている。おもしろいなぁと思って、私は読んでいる。

天啓を受けて、遣わされて、伝道して、身体で本当に伝道されると、聴いて、信じて、祈るというと、聖霊が来る。そうすると今度は、その人が遣わされることになる。皆さん、みんな遣わされている人ですよ。みんな伝道者であり、みんな祭司です。私だけが伝道者でも何でもない。そういうようにして、福音の円環構造と言いたいわけです。だから、今日は「○」を書いておいた。

それだから、アウグスティヌスが『懺悔(ざんげ)録』の告白の第一章でもって、そのことを言っている。一章にかぎらない。ぐるぐるぐるぐる、だんだん展開してしまう。

「汝われらを汝のために造り給いたれば、我らの心は汝の内に安らうまでは安きを得ざるなり。」

これは有名な言葉です。

主よ、汝を呼び求めることと、汝を唱うることといずれが先なるか。また汝を知ることと、汝を呼び求むることといずれが先なるか。知りて悟ることを我にゆるし給え。然れど汝を知らずして如何で誰か汝を呼び求めんや。そは汝を知らざる者は汝にあらざる他のものを呼び求めて、これを汝となすべければなり。あるいはむしろ、汝を知らんが為に我らは汝を呼び求むべきか。然れど今だ信ぜざる者如何で呼び求むることをせん。あるいは宣伝える者なくば如何で信ずることをせん。また主を呼び求むる者は彼を讃えん。そは尋ぬ者は彼を見いだし、見いだす者はまた彼を讃うべければなり。主よ我汝を呼び求めて、汝を尋ね、また汝を信じて汝を呼び求めん。そは汝は我らに宣伝えられたればなり。主よ、わが信仰は汝を呼び求む、こは汝の御子の受肉により、汝の伝道者の奉仕によりて汝の我に与え給いしもの、我に霊感し給いしものなり。」

それから内在の神さまのことを、どうして私の中に入ってくることができるだろうかということを、おもしろく、だんだん展開して言っている。非常に愉快です。

●祈りの世界で受霊すること

そういうわけで、今度はイザヤ書を持ってきた。パウロはイザヤ書を非常に愛読したとみえる。

『ああ美(うるわ)しきかな、善き事を告ぐる者の足よ』と録(しる)されたる如し。
イザヤ書52章の言葉です。
と録されたる如し。16**然れど、みな福音に従いしにはあらず、**
だけれども、ユダヤ人は従わないと。
イザヤいう『主よ、われらに聞きたる言(こと)を誰か信ぜし』17**斯く信仰は聞くにより、聞くはキリストの言による。**18**されど我いう、彼ら聞こえざりしか、然らず『その声は全地にゆきわたり、其の言は世界の極(はて)にまで及べり』**
これは有名な詩篇19篇の言葉です。
19**我また言う、イスラエルは知らざりしか、先ずモーセ言う『われ民ならぬ者をもて汝らに嫉(ねたみ)を起こさせ、愚かなる民をもて汝らを怒らせん』**
これはさっきの申命記32章のところの言葉です。
20**またイザヤ憚(はばか)らずして言う『我を求めざる者に、われ見出され、我を尋ねざる者に我あらわれたり』**
これはイザヤ書65章1節の言葉。求めない者に自分は見いだされた。私たちは神さまを求めなかったんだけれど、知らない間に見いだすことになってしまったでしょ。
21**更にイスラエルに就きては『われ服(したが)わずして言いさからう民に終日(ひねもす)手を伸(の)べたり』と云えり。**
けれども、彼らはなかなか受けとらなかった。これはイザヤ書65章2節の言葉。そういうように、神さまの方から非常に尋ねているし、また呼んでいるのに、ユダヤ人はどうして帰らないかということを、切々と彼は語っているわけです。そうかと思うと、逆に求めなかった異邦人が神さまを発見してしまったりしているではないか。お前たちは何しているんだと。一番近いくせに一番遠いような顔をしているというようなことで、彼らの救われんことを――彼は同じユダヤ人ですから、ユダヤ人の気持ちが、また状態がよく分かっているから――懇ろにこうやって語っているわけです。それで自分は、人よりに非ず、人に由るにも非ず、神さまから直接にダマスコ途上でひっくり返されて、そして遣わされた者だというわけです。

この福音の円環構造でぐるぐる展開していく。これは聖霊がやって来ることが、何と言ったってポイントです。呼び求め、この祈りの世界で受霊することです。

「心に信じて口に言えば救われる」

なんて書いてあるね。「言えば」ということは、告白という意味ですよ。本当に信仰を告白しろと。本当の信仰告白ができれば、それは救われている証拠なんです。だから、これが手足に出れば、行いになるだけの話。口に言ったから、それではいつも行いに表れるかと、それを単なる順序と思ってはいかんですよ。逆になることがある。先ず手足に出て、それから言ったって構わない。むしろ、行の方が先なんだ。

「初めに行為ありき」という方がいいわけだ。要するに、それが行動でなくては。証しの行い、神・キリストを証しする行いです。人間的な行いではない。それは信から発すればそうなんです。告白するというのは、信じていなければ告白はできないから。

大体、そういうような構造になっているから、福音の円環構造なんていうことを言った。ロマ書の十章は、「十」という言葉が十字架でもあるし、縦横の愛でもある。この十章に愛という言葉が一つも出てないね。出てないけれども、信の面が強く出ている。先ず神との関係を円環関係にしろと。そういうわけです。「神―キリスト―我」ということ。